

カラスだんなの およめとり

チャールズ・ギラム文
石井桃子訳



岩波書店

ラスだんなのおよめとり

チャールズ・ギラム文

石井桃子訳

岩波書店 1963

174 p. 23 cm (岩波おはなしの本 1)

小学1~3年

Charles E. Gillham: Beyond the Clapping Mountains,
1944

岩波おはなしの本 1

ラスだんなのおよめとり

定価一五〇〇円

一九六三年七月一八日 第一刷発行 ©

一九八一年九月二五日 第一七刷発行

訳者 いしいももこ
石井桃子

絵 まるきとし
丸木 俊

発行者 緑川 亨

発行所 101 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五

株式会社岩波書店

電話〇三六五―四二一 振替東京六二六二四〇

本文印刷 大日本法令印刷株式会社

製本 株式会社松岳社

表紙・見返・口絵・箱印刷 錦印刷株式会社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

カラスだんなのおよめとり

——アラスカのエスキモーのたのしいお話——
はなし

チャールズ・ギラム文 ぶん
石井桃子訳 いしい ももこ やく
丸木俊絵 まるぎ としえ



岩波書店



もくじ

手ばたき山		5
カラスだんなのおよめとり		35
キラキラ光る火の鳥		59
ネズミどんとノミどん		75
ツルさんの目はなぜ青い		91
キツネの毛がわはなぜ赤い		111
ツメナガおくさんのさいなん		125
カラスだんなとイガイ		145
シギとりようし		157
訳者のことば		173



この本にでてくることばのいみ

エスキモー・アイスクリーム

アザラシのあふらと、木のろうと、木の実と、
雪をまぜたたたべもの

土小屋

しば土と、ぼうやクジラのほねをつかてく
みたてた、アラスカのエスキモーの家

カイアック

エスキモーのつかう、皮をはった小さい舟

パルキ

毛皮でつくった、ずぎんのついたうわぎ

ツンドラ

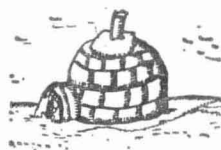
さむくて、木のはえない北国の草原



パルキ

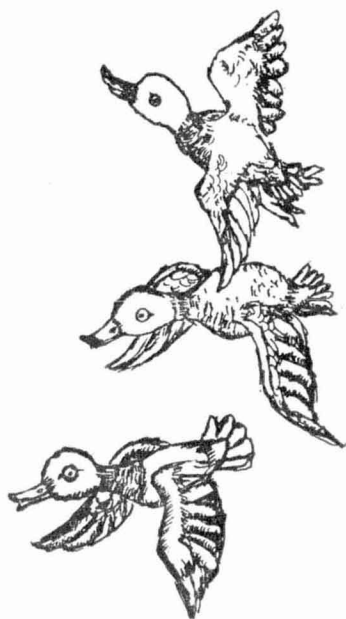


カイアック



土小屋

手
ば
た
き
山



まい年、春はるがくると、アメリカやメキシコから、たくさんさんのガンやカモが、北きたをさしてとんでゆきます。ペーリングかいきょうの、ひろいひろいきしべで、たまごをうみ、子どもをそだてるためにゆくのです。エスキモーの子どもたちは、そういう鳥とりたちをながめて、ことは、どのくらいたくさんさんの鳥が、かえってくるかな、と、かんがえます。ときによると、小さいおとこの子が、

「ごらんよ、あのガンたちを。ずいぶんくたびれているらしいね。きつと手ばたき山をとおりにぬけるのに、とてもはやくとんだからだね。」などということがあります。アラスカのフーパー・ベイという村むらのちかくにすむエスキモーたちは、何年なんねんも何年なんねんもまえに、ふとしたことから、この手ばたき山のはなしをしたのでした。エスキモーたちは、それよりずっとまえから、年としによると、とてもたくさんさんのカモやガンや白鳥ちやうがやってくるのに、また、ほかの年としにはすこしの鳥しか、もどってこないことに気がついていました。そして、すこしかかえてこないときには、そのまえの年としの秋あき

に、南^{みなみ}にわたっていった、たくさん^{たくさん}の鳥たちは、いったい、どうなってしまったのだろうと、ふしぎがりました。

春になると、エスキモーたちは、にくをとりにかくばしょがなくなつて、おなかへります。ガンやカモがかえってくるのは、たいてい、このころでした。こうして、エスキモーたちが、鳥のおかげで、うえ死^じにをしないですむことが、たびたびありました。ときたま、たいへんうんよく、アザラシをみつけて、つかまえることもありましたが、そういうことのない年^{とし}には、鳥のほかには、たべるものがなくなってしまうのです。

そこで、まい年^{とし}、鳥のくるのをまっている子どもたちは、

「鳥がたくさん、うまく手ばたき山を、とおりにぬけてきてくれるといいな。ごちそうがたべられるからな。」というのでした。

手ばたき山のはなしを、はじめてしつたエスキモー人^{じん}は、クシヌク川のきしにすむ

年^{とし}よりふうふでした。

ある夏^{なつ}のこと、このふうふは、木イチゴをつみにでかけました。冬^{ふゆ}になったら、この木イチゴとこおりをまぜて、エスキモー・アイスクリームを、つくろうとおもったのです。ところが、木イチゴの実^みをつんでいるあいだに、きみのような、ピーピーというなき声^{こゑ}をききつけました。なき声^{こゑ}は、すこしむこうの草むらのなかから、きこえてきました。

「あのなき声^{こゑ}はなんだろう？」おじいさんは、おばあさんにききました。「なにか、



小さい鳥^{とり}が、なっているようにきこえるが。」

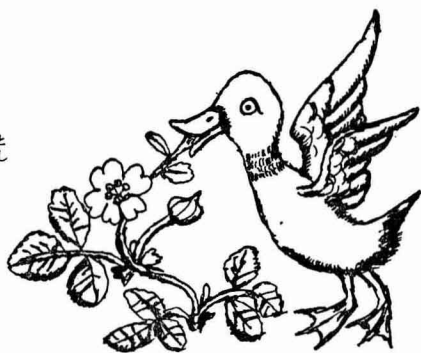
「なにもみえせんねえ。」おばあさんはいいました。「おばけではないかしら。」ふたりは、また、耳をすまし、草むらのほうをながめました。すると、その草むらのなかから、ひょっこり、小さなカナダ・ガンがはいだしてきました。そのガンは、まだ大きなコマドリくらいの大きさで、みどりがかったせなかは、やわらかいふわふわとした、あたたかそうな^けこ毛でおおわれていました。

草をかきわけかきわけ、小さなガンは、とてもかなしそうになきながら、まっすぐおばあさんのところまで、あるいてきました。

「かわいそうに、このひなは、まい子になったのだ。」と、おじいさんはいいました。「うちにつれてかえって、クシヌク川のきしにはえる、やわらかいツルキンバイ草^{そう}で、やしなってや



手ばたき山



ることにしよう。」

こうして、おしやべりや——年よりふうふは、そのガ
ンに、こういう名まえをつけたのです——は、ふたりと
いっしょにすむことになりました。おしやべりやは、ふ
たりのくれる草くさをたべて、どんどん大きくなりました。

そして、大きくなっていくあいだに、カナダ・ガンのこ
とばを、年としよりふうふにおしえました。それから、じぶんの父ちちや母ははが、わるいキツネ
のために、じぶんの目のまえでころされたことや、そのあと二日ふつかも、草のなかでかく
れていたことなどはなしました。ふたりの年としよりが、おしやべりやをみつけてやっ
たとき、このガンは、ほんとにおそろしくて、ないているところだったのです。

やがて、秋あきになりました。そのころになると、おしやべりやは、もうすっかり大き
くなり、わかものガンになっていました。ときによると、おしやべりやは、おじいさ

んたちの土小屋^{つちこや}のまわりを、とんであるくこともありました、いつもかならず、小屋^やにもどってきました。けれども、また、おしやべりやは、いつかは、ほかの鳥たち^{とり}といつしよに、南^{みなみ}にとんでいかなければならないということも、よくはなしていました。

おじいさんふうふは、おしやべりやとわかれることを、たいへんかなしくおもいました。けれども、ひどいさむさが、おしやべりやのために、よくないこともしていました。川がすっかりこおってしまえば、おしやべりやのすきな、やわらかいツルキンバイ草^{そう}をとることも、できなくなるのです。

ある日のこと、おしやべりやは、ツンドラの上を、とんであるきました。冬のあいだ、あたたかい国^{くに}ですぐすために、もうすぐ、ながいながいわたりを、はじめなければならぬのです。そのためには、つばさをきたえなければな



りません。おしやべりやは、この日、ずいぶんながいあいだ、空^{そら}をとんでいました。そこで、おじいさんたちは、しまいは、おしやべりやが、どこかへいつてしまったのではあるまいか、とか、りょうしにうたれたのではあるまいか、とか、しんぱいしはじめました。ところが、ゆうがたもおそくなつたころ、おしやべりやは、もどってきました。しかも、もう一わのカナダ・ガンまで、いっしょにつれてやってきたではありませんか。

それは、わかいむすめのガンでした。このガンは、はじめは、とてもはずかしがつて、おじいさんたちを、こわがっているようにみえました。このガンは、よちよちという名^なまえで、たいへんふとっておりました。

おじいさんとおばあさんは、おしやべりやをかわいがったのとおなじように、よちよちもかわいがりました。ふたりは、おしやべりやからならったことばで、よちよち



にはなしかけてやりました。そこで、よ、ち、よ、ち、も、すぐに年よりふうふになつて、二わのわかいガンたちは、いっしょに南の国にたびだつことになりました。

二わは、ふたりとも、まだおとなになりきっていませんでしたから、ほかのカナダ・ガンのむれがやってくるのをまって、とびたつことになりました。そのようなむれのなかには、かしこい、おすのガンがいて、どこにいったら、やわらかいツルキンバイ草が、たくさんはえているかということや、どこにいったら、りょうしがあまりたくさんいないかということを、おしえてくれるにちがいない、とかんがえたからです。

よくはれた、さむい夜がやってきました。つぎの朝、おきてみると、カシヌク川のきしべには、こおりがはっていました。それは、このガンたちが、うまれてはじめてみるこおりでした。なぜかはわかりませんが、これをみると、おしやべりやたちは、もうじぶんたちが、南へとんでゆくときがきたのだ、ということを感じました。そ

こで、ふたりは、このつぎにガンのむれがとんできたなら、じぶんたちもとびたつて、いっしょにつれていってもらえるかどうか、きいてみるからと、おじいさんたちにはなしました。「さよなら」を、いいにもどってくるひまは、きつとないでしょう。そのかわりに、来年らいねんの春はる、かえってきたら、アメリカでみたいいろいろなことをはなしますからと、おしやべりやたちはいいました。

二わの鳥とりは、おなかがへらないように、ツルキンバイ草そうをたくさんたべ、カナダ・ガンがやってきたら、みのがすことのないようにと、いっしんに、北きたの空そらをみまもりました。

おひるすぎて、おしやべりやは、大きなガンのむれが、ちかづいてくるのをみつけました。けれども、それは、胸白むなしろガンでした。そこで、おしやべりやたちは、とびたちませんでした。カナダ・ガンと胸白むなしろガンは、おなじことばをはなしません。ですから、いっしょにいけないほうがいいとおもったのです。そのうち、もうひとむれのガ

ンが、とんできました。けれども、これは白^{はく}ガンでした。

ふたりは、この鳥たちが、見えなくなるまでみおくりしました。それから、よちよちは、ためいきをついて、いいました。

「あれといっしょにとんでいったほうが、よかったんじゃないかしら。」

ところが、よちよちが、こういいもおわらないうちのことです、カナダ・ガンのさけび声^{こゑ}が、きこえてきました。およそ百^{ひゃく}ほどのカナダ・ガンが、やってきたのです。おしやべりやとよちよちは、大いそぎで、にんげんのもだちにわかれをつげ、どんなにかづいてくる鳥たちといっしょになるために、とびたちました。

大きなおすのガンが、むれのせんとうにたつて、とんでいました。そのあとにつづいて、ほかの鳥たちは、カギになってとんでいました。

おしやべりやは、その年^{とし}よりガンに、はなしかけました。

「あなたがたといっしょに、南^{みなみ}の国^{くに}に、とんでいってもよろしいでしょうか？ わ

手ばたき山